

2008（平成20）年1月1日シューフィルザッツ 語り継ぐ浅草の続編である。

昭和20・30年代 自転車屋から古チューブが消えた。

前号でお話ししたとおり、進駐軍の奥さんの修理靴（プラットシューズ）で、糊で底を張り付ける方法を、痛烈に印象づけられました。私が働いていた宮本製靴でも、糊探しが始まっていました。

戦時中、軽金属の不足で、ベニヤ板の飛行機がありました。そのために開発された強力な接着剤があったのですが、最初に目を付けたのがそれ。しかし、柔軟性に問題があって使えませんでした。そうこうするうちに、「アゴー」という靴用糊が、丸の内では売っていると聞いたので、これを取り寄せ、やっと試作に漕ぎ着けました。

そして誰が言い出すともなく使われ始めたのが、自転車のチューブです。チューブをぐるぐると巻く。チューブを圧着機の代

わりにした訳です。浅草の自転車屋さんから、古いチューブがなくなった程。そんなことを経て、27、28年頃に圧着機が、アメリカやドイツから輸入されるようになりました。

しかし、一気に圧着靴に変わったかと言うと、浅草の産業史を見ると、そんなふうに読めるけれど、現実はそうでもなくて、メーカーの規模、どんな靴をつくっているかによってかなり違いがありました。当時でいうスポーツ、サドルシューズのようなタイプの靴をつくっていたメーカーは、圧着への転換が早かった。逆にいろいろなタイプをやっていたところは概して遅かった。

圧着の普及には底材も関係しています。接着剤と革底の相性が良なくて、踏まず上がりのところに象の鼻のようなしわが寄ってしまう。合成底ならこういう問題は起こりません。圧着靴は、合成ゴム底の普及によって、30年代後半に花開いたのです。

猿若町の皮革問屋新二幸の久保田九市も、圧着機に着目、先駆輸入をし、圧着靴の普及に貢献しています。因みに、圧着機の国産化は昭和27年で、リーダー機械がその先駆者です。（この項続く）



著者が昭和35年に立ち上げた婦人靴メーカー、トロット製靴の創業当時の様子